

漢詩・漢文という呼び方

中国語中国文学

ずっと前の月刊名大文学部で、中国語中国文学の学部生が、中国語中国文学は何をしているところかということについて「漢文を読むところ」と説明をしていました。

ただ、この“漢文”ということば、日本語としてしか通じません。日本では中国のことを王朝名を使って“漢”とあらわすことがあります。“漢”の文だから、“漢文”なわけです。中国では、自国のことを“漢”だと認識しているわけではないので、“漢文”とは言わないのです。

詩も同様です。中国で“漢詩”というと、それこそ漢代王朝における詩という意味になってしまいます。

いっぽう日本では、『日本国語大辞典』（という日本語最大の辞書。実際の用例が引用されているのが参考になります）によると、「からうた」という読みでは、平安時代から用例があり、「かんし」という読みでは、明治時代以降の用例しかありません。うた（韻文）という意味では、和歌があり俳句があるので、中国の古典詩を呼ぶのに“からうた（漢詩）”となったのでしょうか、詩という形式は、日本で読み書きされてきたのは、中国の古典詩の形式しかありませんでした（日本人も詩を作っています）。明治になって、西洋の詩が流入してきた中で、中国の古典詩だということを示すために「かんし」の用語が定着したとみなすことが可能でしょう。

訓読を含めた漢詩・漢文は日本語文化の中のものですが、中国語中国文学ではもう一歩その先、中国の古典としての詩と文を読むところだとみなさんに伝えておきたいのです。ですから、漢文を読むところというのはちょっと不正確です。

ちなみに先の執筆者だった学生は、卒業後、高校の国語教員になりました。その意味では、日本語文化の中にある漢文を学んだことは、教員としての実用にもつながっています。

佐野誠子 教授



北京大学キャンパスで撮影したオンドリ

シドアルジョのエビ養殖

地理学

インドネシア東ジャワ州に位置するシドアルジョ県は「エビの町」と呼ばれています。『エビと日本人』で著名な村井吉敬先生の研究にも登場し、粗放的なエビ養殖が卓越する地域として知られています。シドアルジョの養殖は、人工飼料や化学薬品の代わりに、池の周囲にある自然物を利用する点に大きな特徴があります。たとえば、エビの餌となるプランクトンを発生させるためにガンガンと呼ばれる海草を用いたり、水質管理のためにアピアピというマングローブの葉を利用したりします。このようなシドアルジョの粗放的養殖は、1990年代以降「エコなエビ」の生産実践としての価値を帯びつつ、従来の工業的生産様式（集約的な養殖）へのオルタナティブに位置づけられてきました。

ところが近年、シドアルジョの生産者たちは極端気象に伴う生産性の低迷という問題に直面しています。そのような中、生産者の一部は人工飼料を用いる半集約的な養殖へ生産様式を変更するようになっていきます。一方で、自然物（アピアピやガンガンなど）のさらなる動員を図りながら粗放的養殖を継続しようとする人たちもみられます。重要な点は、後者の中に、消極的な理由から「エコなエビ」の生産を続ける人々も含まれることです。それらの生産者は飼料を購入する経済的余裕がなく、生産様式を転換することが難しい状況に置かれています。

このようにシドアルジョ県では、生産様式の転換を通じて気候変動への適応が図られる中、適応できる人とそうでない人が生み出されています。そして、生産者の経済的な脆弱性が粗放的な養殖の継続と大きく関わるようになっていきます。このことは、気候変動に十分に適応できない人々により、粗放的養殖のオルタナティブ性が担保される側面があることを示唆します。

伊賀聖屋 准教授



シドアルジョ県のエビ養殖池

邦訳のない文献を読む

西洋古典学

私は、『カタステリスモイ』という紀元前3世紀頃に古代ギリシア語で書かれた星座神話文献を研究しています。せっかくの機会なので、日本語訳を紹介して、この作品の魅力を余すことなくお伝えしたいところですが、残念ながらこの文献には邦訳がありません。

西洋古典学という古代ギリシア語・ラテン語で書かれた文献を扱う分野には、『カタステリスモイ』のように日本語訳のない文献が多々存在しています。このような作品を読もうとすると、正直簡単ではない古代ギリシア語やラテン語を勉強する必要がありますし、当然母語で理解するよりも時間がかかります。また、このような機会に紹介しづらく、手軽に読んでもらえないというのも欠点です。ですが、日本語訳がないことは悪いことばかりでもない、と思っています。原典とじっくり向き合うことで、訳には反映できない細かなニュアンスを知れますし、原典を読まないとはわからない魅力や面白さに気付けるからです。そのようにして知った魅力は記憶に強く残りますし、時には他の誰も気づかない、自分だけのものだったりします。私が日本から遠くかけ離れた西洋古典学の文献を研究する理由は、まさにこのようにして『カタステリスモイ』と出会い、その魅力の虜になったからです。タイパ重視で、大量のコンテンツを消費する昨今ですが、西洋古典学の作品に限らず、何か1つのことに時間をかけてみるというのもまた一興です。じっくり向き合うことで、人生をガラッと変えてしまうような出会いがあるかもしれません。

さて、私の人生を変えてしまった『カタステリスモイ』についてお話するには、どうやら紙面が足りないようです。この作品の魅力については、これからこの作品をギリシア語で読まれるであろう皆さまのため、ここでは秘密にしておくことにしましょう。

小島 敦 博士後期課程2年



様々な文献の訳や研究書が並ぶ西洋古典学研究室



月刊名大文学部

第150号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025年3月10日発行